

広島俳句俱樂部

令和五年二月作品集

庭を詠む

大畠 恵

年に一度くらししか帰らない息子達が、庭を眺めて「この庭何とかならない。すごい事に全くない」と言います。その言葉に「春節ごと色々な花が咲き綺麗になるんだよ」と答えていました。梅、紅椿、桃、薔薇、百合とささに咲いてくるのを待ちます。空いた場所に何やかやと種え足すので、春になると「あ、こんな所に芽が出てきた」と驚く事もあり、一番の喜びです。枇杷、さくらんは、薔薇、ブルーベリーも実り、そのまま頂いたりシヤムにしたりと楽しんでいます。ただ、落ち葉も捨てずに根元に残してあるので、冬の間は、見た目はひどい事になります。

俳句を始めた頃、句作に悩んでいた時、庭を眺めてふと語いてくる言葉を並べてみました。なんと全く五七五になりました。句が詠めたとれしく思いました。何とか俳句が続けられるのは、この庭のお陰かも知れません。

春蘭は里の山にも咲く頃か

空青く今年も咲ける母の桃

七き父母の写真に写る桜かな

チユーリップ赤白黄色鮮やかに

紅牡丹白き花瓶によく映えて

薔薇の花庭いっぱいに香りけり

帰郷せる息子とダリア眺めたる

小雨降る庭に公孫樹の落つる音

公孫樹散る音を聞きつお茶を飲む
風吹いて山茶花の花散り急ぐ

『作品鑑賞』

西矢

「庭を詠む」は、大畠恵さんの、庭に対する並々ならぬ愛情が感じられる作品です。四季を通して様々な植物が花を咲かせ、実りをもたらすとのこと。とても豊かな庭が想像され、また、ありのままの姿を受け入れる作者の心が伝わってきます。

空青く今年も咲ける母の桃

お母様の植えた桃だろうか。開花を毎年楽しみにしている。しかも今年は、桃が晴天の日を選んだかのよう。

帰郷せる息子とダリア眺めたる

ダリアと男性はよく似合うと私は思う。久しぶりの息子さんと、ダリアをうれしそうに見せている作者。とても大切な時間である。

公孫樹散る音を聞きつお茶を飲む
もうすぐ冬がやってくると思いつながら、お茶を飲む作者。観察ではなく感覚で感じているという纖細さ。

月出でて備中國照らしけり

初景色吉備の家並がそこかしこ

裸木に鳥の来てるる廃寺跡

寒昂大路は山の向行き

岩山よ淋しくないか月汎えて

難所へとしばらく船へる冬の水

冬の水見つめ休める大路かな

難所へとしばらく船へる冬の水

岩山よ淋しくないか月汎えて

難所へとしばらく船へる冬の水

佐保光俊

参詣の帰り道なる帰り花

初任時の寡母を想ふ阪神忌

雪明り雨戸の隙間より入り来

電線の雪の零れて吾が肩へ

マスクとり朝の大氣を吸ひこめり

息白くバスに乗り来る高校生

門前にガードマン立ち大試験

川下る雁木タクシー春隣

駄す母の快復願ひ豆を撒く

まだ明けぬ空に月あり春立ちぬ

村上正人

よう来たと鶴の後を追ひにけり
飛んですぐ近くにとまり尉鶴

鶴鳴いて坂道づく屋敷町

冬晴に腕を広げ伸びをせり

初雀飛び交ふ道を駆へゆく

賑はひの二日の町を歩きけり

霜の夜のまだ明けぬうち通勤す

凍空を触かすかに日の差しにけり

臘梅に顔寄せてるる女かな

臘梅の香る家へと坂下る

高尾ひとみ

日脚伸ぶ少女に添へる盲導犬

春霞流れてゆける嚴島

野の風に押されて梅を見てゐたる

上げ潮に素つて眠れる春の鴨

春の疊甲羅干しする亀眺む

春泥を洗ひ落とせる車椅子

踏切の向かひに一人春の月

小さき構跨いで三ツ葉摘みにけり

畑焼の煙散歩の吾つむ

桃の花に来てあら雨の降りだしぬ

あざみ

かまほこの豊かな匂お正月

ピアノ弾く指よく動く二日かな

ガラス越し食パン並ぶ五日かな

目きつむり子のピアノ聴く六日かな

初御籤ひとり離れて見てゐる子

初雀羽音大きく飛び立てり

椀ごとに數を達へて雑煮餅

我ひとり餅なき雑煮すすりたり

誕生日の花束を生け寒の水

落葉搔音の近づく石畳

並矢

釣船の音の安らか冬の瀬戸

青天に臘梅匂ふ小路かな

二三羽の鴨の鳴いて枯柳

母の寝向ほどよく陽氣を立てておく

体調を患者に向うて衾雪

生姜湯のたゆたふ湯氣や風邪心地

感冒のまどろみで聞く家事の音

鳴き雪や夫と詣づる三千院

霜降ればかたち新たや名画し草

寒月へ背ナキ伸ばして散策す

綾乃

初雪の川面に消ゆる静けさよ

臘梅に糠雨の降る夕べかな

ゆくりなく冬雲去りて鳶の飛ぶ

山の端の枯木定かな夕べかな

冬の月静かに懸かる夜更けかな

寒雀藪にもぐつて鳴いてきり

薄日差す沖を寄せ来る冬の波

町角の店のおでんの懐かしき

犬の名を尋ねる人や冬の園

顔先に桜の冬芽雨に濡れ

寒明けやパジャマのままで窓を開け

寒戻る少しバイクを吹かしたり

夜氣迫り雨戸閉てれば春窓

春の海工場の煙映しきり

愛犬の足跡辿る磯遊

岸ひとつ越えて畦焼く煙来る

轡の重なり今日の山歩き

春風や展望台に我ひとり

春風や観光列車過ぎ行けり

花の芽の樹らむを見る停車場

何もかも包み込みたり雪積る

風吹いて降り積む雪の飛ばさるる

臘梅を生けし窓辺の香りたる

雪柳溪流に沿ひ咲きにけり

道の駅分葱を求め帰りたり

田舎道揃んで戻りし野蒜かな

紅椿いちばん先に咲きにけり

草の芽の土もち上げて臘らめり

紅椿足摺岬に咲く頃か

母の忌の墓に来たれば山笑ふ

井藤希

宗吉

大畠恵

牡蠣筏引いて音戸の瀬戸を抜け

神主と花木の話日脚伸ぶ

登過ぎに日差の戻るクロツカス

早朝のまだ濡れてる春の森
涼風にテントの揺れて和布売り
初音せり玉垣終る辺りから

玻璃越しに朝日の差して君子蘭
曳き船の仲へと早し春の朝

寺町の路地に買うたる草の餅

残雪の道来て酌めり毒の祝

雪よ雪優しく村を覆はなむ

雪落とし枝から鶴飛び立てり

校庭にどんどの組まれ參觀日

左義長の青竹運ぶ高校生

初寅祭クラスごと行く小学生

一の寅屋台に買ひしりんご飴

夫の本付箋が多く日脚伸ぶ

二紀展の友の絵樂し日脚伸ぶ

真向ひの雑木林に初音かな

梅林の中の小道に入りけり

寒林に鳥進ふ鳥の声通る

細き道譲り令ひゆく探梅行

光ほどの雨の残りて草萌ゆる

踏み入れば鳥声高し梅の園

白梅のあちこちを飛び鳥の鳴く

紫木蓮角を曲がれば見えてくる

花ミモザ搖るる辺りが風の道

故郷に近づく辺り春の雪

言葉なく友と見てる春の月

芝居はね朧月夜を帰りけり

暁子

すみれ

知佳子

日を受けて畠の人参引いてきり

パパ帰るさあ豆撒き始めよう

春穀洗濯物を取りに行く

店先に梅の一枝残りきり

桃咲くや母は実家に戻りたり

シクラメン義理の兄よりもらふ母

母が家の前の川原に猫柳

食卓の上で嬾らむ猫柳

桃咲くや山越えをして町に出る

風光るサンルーフより顔出す子

ちどり

来る時も別れる時も振るう袋

臘梅や雲と見紛ふ暁の月

冬鳥の声や川面に浮きし苔

冬萌やひとりの時はひとり言

寒晴や赤き実に来る尉鶴

川光る柳の冬芽の紅さかな

節分の穂上がるを見届ける

立春や晴のち曇りのち晴れて

今日からは春月となる光かな

風光る歩いて俳句作りきり

辻純江

仏牙ゆ三十三間堂訪へば

大らかに日を浴びてをり牡蠣殻

初雪に目を輝かせ子の跳ねる

いそいそと女正月靴を履き

町会へ出掛くる父のインバネス

インバネス纏ひし父の懐かしき

屈み見る蘿の真ん中寒牡丹

一步づ雪しまく山進みけり

吹雪く山耳を押へて登りたる

霜枯の鉢を日向に出してきり

雲雀

枯れた蓮一面にある咲きし跡

春待つや不動産屋の親子の背

団子屋に開け放しの春来たる

自販機と順番待ちの二月かな

春浅し点字ブロックを行くキャリー

城壁の切込み接ぎや梅の花

春の水六角形の池に傳ぐ

梅見する江戸の景色か殿の居間

落ち椿込つて夜の遊歩道

銅像の腹を見上げる春の旅

裸木のメタセコイアの直立す

裸木に真つ白な鳥止まりけり

椋鳥の来てとことん冬菜食ひ荒す

笹の葉の一つ一つに雪の積む

わづかなる雪搔き集め雪兔

酒好きの父に温めの玉子酒

ロープウェイ降りて樹氷の九重山

水仙の二叢三叢咲きにけり

寒明やシヨツビングでもしましようか

せせらぎの音に近づき梅探る

新しき傘持つて行く雪催

寒卵割つて吉兆占へる

裸木の実となるとき雀かな

眼鏡の子大縄跳に入りかね

着ぶくれの子のランドセル並びゆく

つくばひに屈んで触るる氷面鏡

始業ベル鳴れども止まぬ雪合戦

しづり雪音に飛び立つ雀かな

米糠で磨きし床に日脚伸ぶ

地下街にシヨバン流るる二月かな

ふじ女

松田裕子

村上理江

夕時雨止んで町家に灯の点る

波音のはか無かりけり冬銀河

走り根に冬の木洩れ日してゐたり

冬の鳥大樹に群れて鳴きにけり

夕暮の日の差してゐる冬木の芽

露天湯にしづかに侵かる雪月夜

冬董トロッコ列車動き出す

梅園の人の流れに風の吹く

母の字で書かれし日付種袋

森口良樹

比叡には雪と聞きたり夜の更くる

塔のことを高き窓より雪の街

出棺の頃より雪の降り出ししぬ

雪しまく長き回廊巡りをり

新しきパン屋のできて街二月

通り雨過ぎて明るき二月かな

手のひらを温めてゐる二月の湯

海見えて降りみ降らすみ轍椿

口笛の自転車過ぐる春の夕

欄干の擬宝珠にふれ春の旅

桑門わかこ

電線の雪を鴉の落としたる

やいかがし千木を煙らせ鰯焼く

境内の鳩と福豆分からちをり

水音の高き前川春來たる

奥宮へ出る玉垣梅舎む

池底の鯉浮き上がる四温晴

門曲がり鳥骨鶏鳴く春の朝

弟の畠打つ音の続きをり

山野ウタ

除夜の鐘遠く聞こゆる里の夜

大晦日鐘を数へて眠りけり

しんしんと隣の屋根に雪の積む

我が父の大根を食べ温まる

冬枯に鉄打つ父や里の烟

冬の空雲の間に間に覗く青

里の庭母の愛でたる梅一輪

中野明美

対岸の枯葦映し汽水川

寒風に胸毛の靡き鶯停てり

松が枝のつららに朝の日の差して

黒松の松穂に乗る日白かな

常夜灯に番の鳩や花あせび

嚴寒や厚手の布で蛇口巻き

秋沙

須美れい

ひとり打つ拍手の音寂氣かな

お正月よまざま混ざる遊び唄

初荷とふ馬も車も姿消ゆ

乗れきつて乗れぬ竹馬八十路かな

口數の少なくなりて雪の夜

春浅し古き友より便り来る

朝市の漁師の店に呉布買ふ

白梅の一輪咲ける枝の先

難飾る部屋に夕日の差し込み

小雪舞ひ信号待ちの靴に落つ

四方より梅の香のする路地通る

落椿ひとつふたつと踏んで行く

春の雨庭の灯籠濡らしきり

生け込みの鉢に入るる初桜

ごみ袋縛る指先かじかんで

雪だるま転がし坂を上りゆく

庭の梅枝に小鳥の飛び交ひて

大宰府の令格祈願列長く

撫子

美耶

河原静子

冬波や大和造りしドック跡

雪靴を夫黙々と手入れせり

戻り来てホットミルクや雪儀

町内の役員決まり春隣

踏み出した長靴に降り雪激し

オムレツの卵を割つて春の朝

ロッジの灯吹雪く木立の先に見え

臥す友に薔あまたの梅抱へ

篠谷ゆり子

高梨英子

上島康子

山茶花のこぼれ落ちたる角の家

雪が降る今日は鶴の声の無く

切手貼る手のあかがり見てるたる

集ひする予定の案内余寒かな

雪解の寒ばたばたりズミカル

落の葦やうやう三つ四つ生まれくる

紀英子

七種のバックの山と積まれきり

大粒の雨の時折り雪になる

冬鳥の鳴く声夕日まで届く

民

手探りでリモコン見つけ夜寒かな

ひよどりが啄んでをり寒南天

お喋りを止めて剥きたる松葉蟹

友岡栄山子

帰り着く二階の窓に冬夕日

雪空に太陽静かに昇りけり

遠目にも水鳥數種池に居る

みき子

玄関の雪に埋もれて植木鉢

片隅に雪の残りて古き寺

春立つや川面おだやか夕日差し

菜の花のおひたし少しはろ苦く

金川昭子

遠藤みき子

雪深き米沢に食ふづづ煮

眼帯をとりし眼に梅一枝

高嶋絹代

春の歌聴きながら今思う母

阿波久

令和五年一月度作品集より

井藤希 私の選んだ十句

一面の刈田となりぬ神の前
枯木立走つてゆける二人かな
大寒の少し明るき帰宅かな
遙き湯の窓を打ちたる寒の雨
太刀魚の刃物のことく売られをり
雪折の枝先沢に触れてをり
蟻涙を眺めて飽きず降誕祭
立ち止まる人のありけり帰り花
寒紅をさして気持を整ふる
荒縄にでべらを吊るし冬星

佐保光俊
村上正人
大畑恵子
暁子
辻純江
松田裕子
村上理江
森口良樹
紀英子
熊谷ゆり子

ふじ女 私の選んだ十句

備中のこの木にいつも鳴の来る
枯木立走つてゆける二人かな
冬風やはるか島まで海光り
山鳴のうまく飛び入る枯木立
すれ違ふ少女の会秋年の朝
まだ知らぬ道のありけり冬ぬくし
母が家に満天の星冴ゆるなり
太刀魚の刃物のごとく売られをり
落ちてなほ生き生きとして冬椿
夜回りの拍子木を聞く小晦日

佐保光俊 村上正人
高尾ひとみ 井藤 希
辻ちどり 知佳子 子
純江 晓希